



後藤嘉宏 Yoshihiro GOTO

教授 Professor

博士 (比較社会文化) Ph.D.

Keywords: 中井正一、メディア (論) 及びコミュニケーション (論) の思想史的研究

Contact: ygoto@slis.tsukuba.ac.jp



Graduate
School of
Library,
Information and
Media Studies

筑波大学
University of Tsukuba

研究概要

私自身は、大学院ではマスコミ論を学び、現在は、国立国会図書館初代副館長である中井正一（1900-52）を研究している。中井は美や芸術の哲学である美学を専攻していたが、美学に記録映画等を組み込み、また読者の投稿のみで作られることをめざした新聞を刊行して、今のマス・メディアの報道の類も美学の対象とした。特に中井のメディアム、ミッテル二つの“媒介”概念を、社会思想史的に研究している。メディアムは媒介物というモノ、ミッテルは媒介するというコ

トであり、あり、またメディアムは本や理論や知識人であり、ミッテルは対話や実践や大衆であった。そしてメディアムが一方であるのに対してミッテルは双方向である。中井はメディアムからミッテルへということをはば一貫して唱えつつ、晩年、そのことへの躊躇の念ももらす。私はその意味を考え続けている。さらにこの研究を敷衍して、図書館からマスコミ、電子媒体までを射程に入れたコミュニケーションの基礎理論の構築を目論んでいるが、力不足でそこまでは及べない。

www.slis.tsukuba.ac.jp

中井正一（1900-1952）のメディアム、ミッテル二つの媒介概念
メディアムとミッテルの見取り図

メディアムの	ミッテル的
媒介物・媒体	媒介、媒介する コミュニケーションする
モノ的	コト的
固定	流動
理論・体系	実践・素材
知識人	大衆
本	会話
安定的	自己否定的
身分的	流動的
形而上学的	機能概念的
知識人と大衆の断絶	知識人と大衆の互換性
一方向性	双方向性

壁がある

壁がない

最晩年以外の中井正一 「メディアムからミッテルへ」(①) とほぼ主張
晩年 「メディアムに支えられたミッテル」(②) も主張 (しかし最晩年でも①という文章も多い)

→この矛盾の意味を中井に即して探ると共に、現代に照射させる

①の現代的意義
現代の双方向性 壁のない状況・待ちのない状況 WikiLeaks、LINE の既読無視を忌避する傾向、等々
壁のないことに、デメリットのある現代の状況→その中でいかに対等性を構築して行くな

②の現代的意義
ボーダレスな時代・・・自分を否定し他者に飛び込むミッテルの媒介の有効性は増す

論文

- 1) 後藤嘉宏『中井正一のメディア論』学文社、2005年(単著)
- 2) 後藤嘉宏「中井正一」伊藤守編『よくわかるメディア・スタディーズ』ミネルヴァ書房、pp.200-201,2009年(共著の単著部分)
- 3) 後藤嘉宏「中井正一におけるメディアム、ミッテル概念の関係性を再考するためにー「脱出と回帰」(1951) 等の再検討と「メディアムに支えられたミッテル」『図書館情報メディア研究』14(1) pp.61-79,2016年(筑波大学図書館情報メディア系)(単著)
- 4) 後藤嘉宏「中井正一「委員会の論理」の「印刷される論理」の二価的側面について」『出版研究』(47) pp.1-21,2017年(日本出版学会)(単著)
- 5) 後藤嘉宏「中井正一の「委員会の論理」(1936)において、なぜ「芸術」の語が出てこないのか？ー「芸術における媒介の問題」(1947) 等との比較を通じて」『図書館情報メディア研究』14(2) pp.15-36,2017年(筑波大学図書館情報メディア系)(単著)
- 6) 後藤嘉宏「中井正一「委員会の論理」(1936)における嘘言の媒介について」『情報メディア研究』16(1) pp.41-69,2018年(情報メディア学会)(単著)

社会貢献活動

著名な鶴見俊輔がリードし、戦後の代表的な文化人集団の一つとされていた思想の科学研究会の会員で、会長をここ数年務めております。もともと現在では会員数も減り、弱体化していますが。私の研究対象である中井正一も最晩年に会員に名を連ねており、中井が事実上主宰した雑誌『世界文化』の同人の久野収、武谷三男も有力な会員でした。この会の趣旨は市井の人々の思想を知り、そして庶民に哲学を、というもので、中井のミッテルの媒介の実践でもあります。

メッセージ

「少年老い易く学成り難し」を実感する年になってしまいました。しかも貝原益軒もいうように高齢になると時間は年々早く過ぎ去ります。しかも35歳くらいまでに読んだ本は鮮明に記憶されているのに最近読むものは右から左へと抜けていきます。哀れな姿をみて、若い人たちが他山の石として励んでくれれば、仕事を続ける意味もあると自分を慰めております。こう弱音を吐きますが、「獅子は我が子を千尋の谷に落とす」、ゼミでのコメントは私も先輩院生も辛辣の極みです。